# ボルツマン先生，黄金郷を旅す

パリティ編集委員会　編
（大槻義彦　責任編集）丸善株式会社
平成6年7月，196頁，定価1339円

**読み物**

お薦め度
☆★★★★

本書ではアメリカの物理関係の学会誌 Physics Today から「科学史の裏側に秘められた」5つの物語を取り上げており，全体のタイトルは，1つ目の「ボルツマン先生，黄金郷を旅す」（ボルツマン；シュワルツシルド編・英訳；原文1905年出版）によっている．そもそも物理学者にとっての黄金郷とはどこだろう．

ボルツマンは，バークレイに招かれて7月4日の花火に陶酔し，成長しつつある巨大な共和国アメリカとアメリカ人の可能性に期待，旅の楽しさを述べている．また大規模な産業施設とささやかな科学実験室のコントラストへの感傷がカバーページにも引用されている．

第2の物語は「マイケルソンの光と影」モイヤー著．ノーベル賞受賞を含む名声のもとは，1887年の長さの標準とエーテル流動という2つの重要な実験によるが，この年には私生活のスキャンダルがあった．しかしこの論文よりも1つ前の実験の記述の方が実験本来の姿を示していて面白いように思う．

科学研究は追試可能なものの積み重ねであるはずだが，第3のレポート「病める科学」（ラングミュア，編集ホール）によると，しばしば科学と病的科学とが混同される．それを見ているのか見ていないのか不明確な閾現象については，主観的効果や希望的観測に惑わされるためである．ここで取り上げられている例が年代も古くなじみがないが，最近では常温超伝導やミニ核融合を思いつく．警告「病的科学は決して過去の問題ではない」．

第4の物語は「狂った科学者」のイメージ（ウエアート著）．紋切り型の科学者像として高潔あるいは傲慢な冷血漢あるいは人類に対する脅威となる人間像を紹介．典型的な議論である「誰が原子爆弾の製造を決定したか？　科学者か，それとも政治家か？」もコラムで取り上げている．解決策は「現実の科学者像を語り続ける」こと．

そのために効果的なことの1つが，科学者自身による文章であるが，5つめの「チャレンジャー事故調査の裏話」（リチャード・ファインマン；88年2月号）では，公式の事故調査の落とし穴，巨大プロジェクトの迷路，そして迷路であること自体が落とし穴となる危険を警告している．

本書は翻訳もので訳自体は，専門家ないし慣れた人々の手になり手堅い．むしろ，これら5レポートを選択した編者の方針がわからない．あとがきによると，科学者も1人の人間，光と陰の部分があり，本書でそうした生き様が見えるというのだが．そもそも科学者が「合理的」な生活を営むと世間に思われているのだろうか．

科学研究の現場を含む紹介のほうが「科学者の生き様」をもっと直接に示して面白いのではなかろうか．偉人伝には飽きた？それなら「ご冗談を，ファインマンさん」など（岩波書店）およびおそらく「さようならファインマンさん」（パリティ・ブックス）の方が格段に面白い．

最後にボルツマンの感傷にひとこと．組織的な科学研究に身をおくのであれ書斎の科学に閉じこもるのであれ，スタイルの違いであって，どちらにしても科学者自身は冒険者でありたい．その魂を持ち続けることができれば，どちらでも良いではないか．どこにでもエルドラド，そして青山はあるのだから．

林　左絵子（国立天文台）